

## 2022 年度 学校経営計画及び学校評価

## 【学校関係者評価委員】

評価委員	所属・役職	事務局	所属・役職
岡本 康志	個別指導学習塾サポーツ京田辺・代表、特別支援教育士	鍛治田 千文	YMCA 学院高等学校・校長
原田 孝	一般社団法人 大阪総合教育支援研究所・代表	小林 直樹	YMCA 学院高等学校・校長代理、事務長
廣田 雅司	大阪女学院高等学校・IB アドバイザー、元校長	池田 博人	YMCA 学院高等学校・校長補佐
博野 英二	LLPチーム経営研究所・代表	二宮 聡	YMCA 学院高等学校・教頭
		林 貴子	YMCA 学院高等学校・主任

## 1. めざす学校像

私たちの学校は、YMCA の正章に掲げる Spirit(精神)・Mind(知性)・Body(身体)のバランスを保ち、未来に希望を持ちチェンジメーカーとなる(=社会をよりよく変えていく)青年を育むための、自由で開かれた学校であることを目指している。そのために「命の尊厳」を教育目標とし、次の4つを教育目的とする。

1. 自分のペースで自分らしく学び、学ぶ楽しさを知ることから自分の中にある可能性を見つける。(学び)
2. 自分の将来に夢と希望を持って歩む進路を見つけ、目標に向かって進む力を身につける。(進路)
3. グローバルな視点に立って物事を考え、世界の平和を創り出す人財を育てる。(グローバル)
4. イエス・キリストの愛と希望の生き方に学び、一人ひとりの尊厳を認め、互いの存在を大切に、信頼しあえる人間を育む。(自尊心)

## 2. 中期的目標(2022~2024 年度)

1. 新学習指導要領に沿って、授業づくりを深め、学びの基礎を身につける教育を行う。
  - (1) 通学型・自宅学習型コースを完成させ、更なる内容の充実を図る。
    - ・多様化している高校生に対して、合理的な配慮を行いながら学校への定着を図り、卒業へと導く。そのために設置した「Y チャレンジ」「マイスペース」「スタンダード」「マイスペ+」「グローバル」「健康スポーツ」「進学」「トランスリンガル」「Yリンク」の各コースのカリキュラムを充実させる。
    - ・上記9つのコースを中心に、一人ひとりにあった学び直しや仲間づくりを積極的に実施し、学力の定着や関係性の構築を図る。
  - (2) 教科力を向上する。
    - ・教科担当を中心に、各教科におけるカリキュラム研究・授業研究を行い、生徒が自発的かつ積極的に学習に向かうために、より興味・関心を持てるスクーリングとするための基盤を確立する。また、レポートの改訂に取り組む。
    - ・各期授業アンケートを実施し、スクーリング担当者にフィードバックを行う。
2. 生徒理解を深め、生徒一人ひとりに寄り添った合理的配慮のある生徒支援体制および校内環境(ユニバーサルデザイン)を実現する。
  - (1) 生徒支援部会を中心に、校内の生徒支援体制および校内環境を整備する。
    - ・生徒情報の共有を密にし、担任が抱え込まず、学校全体で支援していく体制とする。
    - 教科担当講師にも必要な生徒情報を共有し、連携を図る。合理的配慮の実践に全校を挙げて取り組む。
    - ・生徒・保護者が安心してつながることのできる居場所作りを行う。
    - ・研修の実施や生徒支援アドバイザーの助言によって担任の生徒支援力を向上する。
    - ・生徒が校内で安心して学び、過ごせるような環境整備を行う。(ユニバーサルデザイン)
  - (2) 専門家や外部との連携を積極的に行う。
    - ・特別支援教育コーディネーター、スクールソーシャルワーカーを中心に担任、カウンセラーや養護教諭、外部との連携を密にする。
    - ・キリスト教学校教育同盟カウンセリング研究会をはじめとする外部機関との連携を行う。
3. 確実な進路保障の仕組みを作る。
  - (1) 学び直しができる仕組みを整え、進路に向き合う力を育成する。
    - ・一人ひとりが学び直しに取り組むことができ、自ら進んで学習をするような仕掛けづくりを行う。
    - ・生徒のニーズにあったコースとなるよう各コースの内容をより充実させる。
  - (2) 生徒一人ひとりにあった進路支援の充実
    - ・生徒一人ひとりの長所を生かした進路実現ができるように、適切な時期に保護者・生徒と面談を実施し、進路決定率を向上させる。
    - ・できるだけ早期に進路への意識付けができるように進路のカリキュラムを構築する。
    - ・キャリア教育の一環として、他機関と連携し、一人ひとりが多様な職業人と出会い、対話し、校外活動等が体験できるプログラムを構築する。

(3) 自己実現可能な学習支援

・進学コースを中心に大学受験に対応できる学習支援の仕組みを構築する。

4. 開かれた学校づくりを目指し、生徒が活躍できる場を増やす。

(1) YMCA の特徴を活かした海外交流プログラムを充実させる。

・YMCA のネットワークを通して海外の学生と交流する機会を提供し、グローバルな視点に立って物事を考える機会を持つ。

(2) 生徒が主体的に関わるスクーリングや特別活動を実施する。また、ボランティアや世代間交流の機会を提供する。

・総合的な探究の時間や特別活動において、YMCA の特長を生かした内容（ペアワークやグループワークなど）を実施する

・YMCA 内部での連携を通して、学校通信で学校行事やボランティア案内の掲載を増やし生徒が積極的に取り組めるように支援する。

(3) 他校、他機関と連携する。

・現在の連携先のキリスト教学校教育同盟校や大阪府通信制高校グループ・一般社団法人との関係性を深め、NPO 法人・医療・教育・福祉機関と積極的に連携を取り、生徒の可能性をひきだす成長の機会とする。

5. 持続可能な学校とするための体制を確立させる。

(1) 社会の大きな変革の中で新しい学校の形を探求し、地域社会に貢献できる学校を目指す。

・ICT の活用を図り、Edtech を推進する。

＊レポートの電子化（ロイノートの活用）に取り組み、対話的・協働的な学びの場の実現に取り組む。

・専修学校高等課程と共にインクルーシブ教育実践校として打ち出し、生徒を地域とともに育む。

・日本語のサポートが必要な生徒へのカリキュラムを構築する。

・医療機関や公益財団法人、その他教育機関と連携し、健康に不安をもつ生徒の「身体づくり」の一環として、当事者およびその保護者

の学びや分かち合いの場、オンラインでのヘルスケアプログラムやヘルスケアキャンプを実施し、その効果を検証、考察し発表する。

(2) 組織改善の取り組みと将来を担う人材の確保をする。

・教員間で支えあう組織作りへと意識改革を行う。

・生徒に寄り添い、信頼関係を築き、学力向上につながる事ができる教員の確保、養成を行う。

3. 教職員自己評価の結果と分析・学校関係者評価委員会からの意見

教職員自己評価の結果と分析〔2023年3月実施分〕

1. 新学習指導要領に沿って、授業づくりを深め、学びの基礎を身につける教育を行う。

引き続き学習指導要領の改訂に伴い、「教育課程の周知」「教育計画」「教員・教科間連携」「教員研修」に力を入れた。問2「教育課程や教育活動について、生徒・保護者に適切に説明を行っている」の肯定的評価は2021年度72.7%→2022年度93.3%。問3「各科目の学習計画が生徒の学力に応じて適切に作成されている」の肯定的評価は2021年度81.8%→2022年度80%。問4「教員間教科間の相互理解がなされ、信頼関係に基づいて教育活動が行われている」の肯定的評価も2021年度54.6%→2022年度80.0%。2021年度に引き続き、各教科担当がグランドデザインに基づき、観点別評価の3観点を意識して取り組んでいることの表れだと考える。一方で、問36「教員間で授業内容を評価、意見交換などを行う機会がある」の肯定的評価は2021年度63.7%→2022年度46.6%と減少。授業アンケートの実施や講師間の連携強化に努めているが、有意義な意見交換の機会が不足していることから改善の余地がある。また、在籍している生徒の学力差が幅広い現状で、生徒の学力向上実現のために充実した学習計画の作成を今後も進めていく。

2. 生徒理解を深め、生徒一人ひとりに添った生徒支援を実現する。

2017年度から特に（スクール・ミッション）の浸透に力を入れてきたことにより問1「スクール・ミッションがよく浸透している」の肯定的評価も年々向上してきた。肯定的評価は2021年度100%→2022年度86.7%と13.3%低下した。これは2022年度の自己評価対象者に本校での教職員歴が浅い教職員が増えたことによるものと分析している。改善のため、引き続き、教職員一丸となりスクール・ミッションの実現を最優先事項として意識し、一人でも多くの生徒が本校で自己肯定感を高めて成長できるように取り組んでいきたい。

また、2019年度より合理的配慮の推進・整備をすすめたことにより教職員の生徒支援への意識が向上しており、2022年度も問27「生徒支援は学校の方針に従っている」問28「生徒の学校生活の支援に組織的に対応する体制がある」問29「生徒支援において保護者との連携ができています」問31「カウンセリングマインドを取り入れた支援体制がある」問32「学習指導において、生徒の実態に合わせた指導方法の工夫・改善を行っている（教科指導除く）」のいずれの項目も肯定的評価は90%以上となった。本校の生徒支援体制が教職員全体のスクール・ミッション理解のもとで全校的に機能していることが示されている。一方で問30「生徒が主体的に活動できるよう学校全体で支援している」の肯定的評価は2021年度81.9%→2022年度66.7%と減少。一部の生徒の主体的な活動支援はできているが学校全体での支援は今後の課題である。

3. 確実な進路保障の仕組みを作る。

2016年度の肯定的評価が66.7%であった時点から、進路部会を中心とした進路支援の取り組みを全校的に広げることができたことにより、問33「生徒一人ひとりの興味・関心・適性に合った進路選択ができるような支援体制がある」の肯定的評価が2022年度初めて100%となった。「進路の多様化や複雑化」にも進路部会と他の教職員との連携、教職員への共有や研修を強化してきた結果がでている。事実、2022年度の進路決定率は90%と通信制高校の中では、

非常に高い決定率となっている。2022年度評価より新たに問34「キャリア教育：生徒が社会的・職業的自立に向かい、将来を見据えることを主眼とした教育活動を計画的に行っている」、問35「保護者との連携：進路支援において、保護者との連携ができています」の項目を追加。問34の肯定的評価73.4%、問35の肯定的評価86.6%で、今後は、より社会との架け橋となるような進路支援を目指し、キャリア教育と保護者連携の実践をすすめる。

#### 4. 開かれた学校づくりをし、生徒が活躍できる場を増やす

2017年度の校舎移転に伴い、開かれた学校づくりに力をいれ、学校行事やボランティア活動、地域交流等に取り組んできた。しかし、2019年度～2022年度はコロナ禍のため、教職員の評価もばらつきがあります。2021年度と2022年度の比較では、全体的に減少している。

問14「地域や地域住民との交流ができています」の肯定的評価は2021年度90.9%→2022年度46.7%。問22「部活動・同好会は活発に行われている」の肯定的評価は2021年度36.4%→2022年度33.4%。問23「ボランティア活動は活発に行われている」の肯定的評価は2021年度81.8%→2022年度80%。問24「イベントなど学校行事は活発に行われている、校外のイベントへの参加も活発である」の肯定的評価は2021年度81.9%→2022年度73.3%。問25「スポーツ活動・芸術文化活動を計画的に教育活動に取り入れている」の肯定的評価は2021年度91%→2022年度73.3%。問26「他国の歴史・文化の理解、異文化交流など国際理解に対する教育活動を取り入れている」の肯定的評価は2021年度81.9%→2022年度73.4%。などコロナ禍でできなかったことが影響していると思われる。

「開かれた学校づくり」は地域活動に力を入れてきたYMCAとして、地域を学校周辺に限らず、生駒の一般社団法人と連携し、自然体験や地域や多くの職業人との出会いの提供など特色ある取り組みができた。引き続きYMCA内外の連携によるボランティア活動等をより推進し、特に生徒に家庭と学校以外での居場所と体験と良質の出会いを提供し、生徒の可能性を伸ばすことに力を入れていきたい。また、そのことを学校全体として支援し、主体的・協働的に参加できる仕組みづくりを行う。

#### 5. 持続可能な学校とするための体制を確立させる

Edtech推進に関しては、問15「生徒の情報活用能力の育成を図っている」の肯定的評価が2021年度54.6%→2022年度52.4%。問16「情報の発信に伴う責任など情報のモラル面の教育に十分取り組んでいる」の肯定的評価が2021年度45.5%→2022年度26.7%と大幅に下がる結果となった。2023年度は、最新のアプリケーションと授業で生徒を一人ひとりの状況を把握できる管理システムを導入するためメディアルームのPCの入れ替えを実施する。2024年度はタブレットの活用、レポートの電子化（ロイロノートの活用）に取り組み、生徒を取り残さない対話的・協働的な学びの場の実現と情報能力育成、情報モラルの向上を目指す。

また、社会の要請に応えるインクルーシブ教育の実践や日本語のサポートが必要な生徒のトランスリンガルコース設置、健康教育など社会課題に直面している生徒への支援に取り組んできた。問17「研究体制」の肯定的評価は2021年度63.7%→2022年度66.6%とやや向上したが問18「教育体制」の肯定的評価は2021年度72.8%→2022年度60%と減少。現状維持ではなく、教育活動が年々進化していると感じるような取り組みと人権教育の基盤づくりを行う。また、健康教育の実践においては問21「知性・身体・精神バランスのとれた人の成長に寄与する健康教育を実施している」の肯定的評価は2021年度36.4%→2022年度73.3%と大幅な改善が見られた。2022年度よりスタートしたYリンクコースやヘルスケアキャンプ、オンラインヘルスケアや健康のつどいが浸透したと思われる。

毎年課題になっている組織改善の項目では、問4「教員教科間連携」の肯定的評価が2021年度54.6%→2022年度80%と上昇、問5「教員と事務職員の連携」の肯定的評価が2021年度81.8%→2022年度73.3%とやや減少、問6「会議の有効性」の肯定的評価が2021年度81.8%→2022年度60%と減少。教員間で支え合う体制は整ってきている一方、会議のあり方は見直しを行っていく。問37「効果的な校内研修計画を立案し、教職員に実施している」の肯定的評価が2021年度81.9%→2022年度66.6%と減少。問38「初任者等、経験の少ない教員を学校全体でサポートする体制がある」の肯定的評価が2021年度36.6%→2022年度46.7%と上昇。問39「教員が計画的に体外計画受ける体制が整っている」の肯定的評価が2021年度54.6%→2022年度46.7%と減少。問40「研修、研究に参加した成果を他の教員に伝えて情報を共有する体制がある」の肯定的評価が2021年度36.4%→2022年度60%と上昇。生徒に寄り添い、信頼関係を築き、学力向上につなげることができる教員の確保、養成を行うために、年間での校内の研修体制を組んでいるが効果的であると受け止められていない。一方初任者のサポート体制に関してはメンター制度や、初任の方向けの会議があり、少しずつ改善に向かっている。組織改善は持続可能な学校とするためには最重要項目であるため、学校法人全体の課題として取り組んでいく。

学校関係者評価委員会からの意見〔2023年5月29日・6月26日・8月28日 学校関係者評価委員会〕

総評として、全般的にアンケート(在校生、卒業生、保護者)は、大変高い評価になっている。生徒、保護者とともに学校への信頼度が高く、学校への満足度が高い。教職員の日ごろの尽力が評価されている。

【教職員自己評価について】

- ・部活動については、スポーツというスキルを通じて人間性が築かれていくという効果があることを鑑み、社会教育としてYMCAの関連事業ウエルネス部門とより連携することを提案する。
- ・財務関係について教職員がどこまでの理解と把握が求められているか、がわかりにくいいため、明確に示すべきである。
- ・学び直しの成果を測る指標を持っておくべき。それによって在校生・保護者の声がフィードバックとしてより生きてくる。
- ・(研修が十分でないという結果から)学校としては研修をする意義を示していく。研修の種類や数は用意されているので、任意参加が多いことが自己評価が低い原因の一つではないか。キリスト教学校教育同盟の研修をはじめとする外部研修は有意義なものが多いので、積極的に教員を外部研修に出すべきである。
- ・現在取り組んでいる教育方針をどのように継承していくかを考えないといけない。後輩の教職員には頭ごなしの指導ではなく、共にいて一緒に関わっていくという姿勢での指導が大切である。

【生徒アンケートについて】

- ・より客観性のあるアンケート結果とするために、生徒・保護者ともアンケートの回収率を高めるための改善が必要である。
- ・スマホやタブレットの活用が順調にすすんでいるが、一方依然活用できていない生徒がいる。生徒が主体的に情報を把握できるような情報発信を行うことが必要である。
- ・新たに項目設定したコースの満足度で在籍生の否定的評価が多いのが気になる(卒業生は否定的評価はほぼない)。コース内容の確認と見直しが必要ではないか。生徒の声を面談等で聞いて上で改善をするべきである。
- ・レポート提出から返却までの時間がかかりすぎているという生徒の声が多数ある。2024年度からのレポート電子化により改善を期待したい。
- ・現在は電話が教職員とのコミュニケーションツールのメインとなっているが、生徒にとってよりハードルの低いコミュニケーションツールが必要である。
- ・卒業生の回答率が昨年35.6%→今年21.9%と大幅に落ちているので回収方法の工夫が必要である。
- ・卒業生の否定的評価(1と2)が全体的に昨年よりもかなり多い。回答者が少ないので評価に影響しやすいのも一因だが、在校生のアンケートはそこまで大きな数値の違いは昨年とはなく、卒業生の評価に違いが見られるのが気になる。
- ・卒業生在校生どちらも、「ボランティア」・「特別活動」・「地域との活動」の項目が昨年度より2(=あまりそう思わない)の回答が高い数値を示している(ボラ12.8%→17.3% / 特別18.6%→22.7% / 地域15.7%→25.1%)。授業以外の取り組みについて、より主体的に参加できるような内容に改善をする必要がある。
- ・卒業生の「スクーリングでの生徒のマナーは良かった」の2の回答が昨年度より増加しており、同じく「必要回数以上のスクーリングに出席していた」の1(=思わない)の回答が昨年度より増加している。生徒は落ち着いた環境で学習ができていると認識しているが、今一度スクーリングの受講姿勢について担任を中心とした働きかけが必要だと感じる。

【保護者アンケートについて】

- ・カリキュラムや学習サポートに関しての項目で否定的評価が多い。改善方法を考える必要があるのではないかな。
- ・学校行事の参加のしやすさについての評価が低い。体育大会とスクーリングが重なり参加できなかったという声があったので今後は改善するべきである。また、申し込みが必要な学校行事が多いことが影響しているのではないかな。気軽に参加できるような行事を検討してほしい。
- ・学校行事は参加者の対象を明確にして案内してはどうか。案内される内容が自分向けなのかがわからないのではないかな。
- ・案内の通知の遅さや誤った記載内容があることについての不信感があるので対応が必要である。
- ・保護者アンケートは卒業生在校生ともに「教育内容・学習支援」のカテゴリーの項目が軒並み2の回答が昨年度より増えている。教育や学習サポートに満足していない保護者が増えている可能性がある。

【自由記述の回答内容より】

- ・保護者の期待と、学校の理解に齟齬があるのではないかな、保護者がもっている本校へのイメージとズレが生じている可能性がある。
- ・3者面談や懇談の機会に対する期待が大きいのではないかな。より全校的に実施できるよう検討してほしい。
- ・自分で「選択できるように成長する」が通信制の大きな役割ではないかな。進学後の定着にも関わってくることなので、自立に向かっていけるような教育内容を充実させてほしい。
- ・「学校行事は参加しやすいものであった」の項目に対して在校生保護者は約20%が否定的評価である。学校行事はイベントや進路目的のものを中心にたくさん設定をしているが、参加者の増加につながっていない。案内がうまく伝わっていないのではないかな。対象をもっと明確にして案内してはどうか。
- ・教職員は生徒のことをよく理解しているが、保護者がその現状を把握できていない保護者へのフィードバック方法の研修を加えてはどうか。家庭と学校とでは生徒が見せる顔は違うので、学校での様子もきちんと伝えていけるようにしなければいけない。

4. 本年度の取組内容及び自己評価

中期的 目標	今年度の重点目標	具体的な取り組み計画	評価指標	自己評価 (%はそれぞれ在籍生/卒業生の順)
授業づくりを深め、学びの基礎を身につける教育を行う	(ア) 各コースのカリキュラムを完成させ、更なる内容の充実を図る。	(ア) 各コースのカリキュラムで学び直しや進路支援の充実を図り、生徒が着実に学校に定着し、自分にふさわしい進路選択と卒業を実現できるようにする。	(ア) 生徒アンケート問6「所属したコースは満足いく内容だった」問37「入学して全体的には満足していた」問38「この学校に入る前と後で、自分は変わったと思う」、及び保護者アンケート問11「授業のカリキュラム・内容は満足していた」・問12「教育内容はお子様にあっていた」問32「この学校にお子様をいれて良かった」問33「この学校に入る前と後で、お子様は変わった」	(ア) 生徒アンケート問6の肯定的評価は2021年度 問6は項目なし⇒79.1% / 97.1%、問37は92.6% / 100%⇒91.8% / 91.9%、問38は82.9% / 93%⇒72.3% / 86.5%であった。保護者アンケート問11は87.8% / 90%⇒83.3% / 81.4%、問12は91.5% / 96.7%⇒86.5% / 93%、問32は97.9% / 100%⇒94.8% / 95.3%、問33は87.8% / 96.7%⇒90.1% / 100%であった。 ⇒問6の項目を追加。在籍生の肯定的評価は79.1%、卒業生は97.1%であった。コースの満足度にやや課題があることがうかがえるため、生徒・保護者のニーズに合ったコース運営ができるよう生徒へのふりかえりを実施し、改善につなげる。また、卒業生およびその保護者は、入学後の満足度が高く入学前と入学後の変化を感じていることから各コースでの取り組みの成果と言える。
	(イ) スクーリング内容の充実を図り、より興味・関心を持てるスクーリングとするための基盤を確立する。	(イ) 学習指導要領改訂を機に、スクーリングの学習内容が生徒の学力と生きていくための力となるよう充実を図る。	(イ) 生徒アンケート問14「スクーリングでは分かりやすい学習指導をしていた」問15「教員は熱心に情熱を持って、授業に取り組んでいた」問18「特色ある科目について満足していた」問20「必要回数以上のスクーリングに出席していた」23「レポートは分かりやすく工夫されていた」、及び保護者アンケート問14「本校のスクーリングは学習効果が高まるよう工夫されていた」	(イ) 生徒アンケート問14の肯定的評価は2021年度 90.2% / 98.3%⇒93.2% / 91.9%、問15は94.6% / 98.2%⇒94.1% / 91.9%、問18は88.7% / 96.5%⇒88.1% / 94.6%、問20は80% / 93%⇒81.8% / 83.8%、問23は89.7% / 98.2%⇒91.3% / 89.2%であった。保護者アンケート問14は87.3% / 91.7%⇒83.9% / 88.4%であった。 ⇒全体的にやや減少しているがいずれの項目80%以上である。引き続き、各期授業アンケートの実施し、スクーリング担当者にフィードバックを行いながら学力と生きていく力を養うための充実したスクーリングとしていきたい。
	(ウ) 一人ひとりが自分のレベルにあった学び直しができ、学力の定着ができるようにする。	(ウ) Yチャレンジコース・マイペースコースを中心に、学びなおしの講座やYラーニングによって学びなおしを推進する。	(ウ) 生徒アンケート問27「学びなおしの講座や学びなおしの取り組みがあり活用することができた」、及び保護者アンケート問15「基礎的な学力を身につけさせる指導がなされていた」問17「学校の学習サポートは充実していた」	(ウ) 生徒アンケート問27の肯定的評価は2021年度 67.8% / 71.9%⇒60.1% / 56.8%、保護者アンケート問15は87.2% / 91.6%⇒81.6% / 86.1%、問17は87.2% / 93.4%⇒89.1% / 88.4%であった。 ⇒学びなおしの活用に関する問27は2020年度評価に引き続き低下。他の項目よりも肯定的評価がかなり低い結果である。2024年度よりEラーニングの見直しを行い、ロイロノートを導入し、一人ひとりが自分のレベルにあった学び直しができ、学力の定着ができるようにする。

<p>生徒理解を深め、生徒一人ひとりに添った生徒支援を実現する</p>	<p>(ア) 生徒支援部会を中心に担任・講師・養護教員・カウンセラー、スクールソーシャルワーカー、支援アドバイザーで学校全体として生徒支援を行っていく</p> <p>(イ) 合理的配慮が必要な生徒に行き届き、申請と実践がスムーズに行われるよう、体制と環境を整える。</p>	<p>(ア) 毎週全担任が出席する生徒支援会議や講師への情報共有で、学校全体として生徒支援を行い、生徒が相談しやすい環境を作り出す。</p> <p>(イ) 特別支援教育コーディネーターや生徒支援部会を中心に合理的配慮を行う体制を整え、生徒が学校生活を送る上で適切な配慮ができるようにする。</p>	<p>(ア) 生徒アンケート問28「学校は質問や相談に対して親身になって対応していた」問29「いつでも相談できる環境が整っていた」、問30「保健室・カウンセリングルームがあったので安心できた」及び保護者アンケート問5「学校は安心できる場所になっていた」問21「教員はお子様へに接していた」、問22「教員のお子様への対応の仕方に満足していた」</p> <p>(イ) 生徒アンケート問17「授業は安心して受けられる雰囲気であった」、問31「学校の対応は自分の状況に配慮したものであった」、及び保護者アンケート問22「一人ひとりに対する生徒支援体制が整っていた」、問24「学校は家庭と連携し、生徒支援が出来ていた」、問25「学校はお子さまの悩みや相談について適切に対応していた」</p>	<p>(ア) 生徒アンケート問28の肯定的評価は2021年96.1% / 100%→94.9% / 91.9%、問29は93.1% / 100%→90.9% / 91.9%、問30は86.8% / 96.5%→89.1% / 89.2%であった。保護者アンケート問5は93.1% / 98.4%→91.7% / 95.4%、問21は98.4% / 100%→94.8% / 95.4%、問22は93.7% / 100%→91.7% / 93%であった。</p> <p>(イ) 生徒アンケート問17の肯定的評価は2021年度97% / 100%→93.6% / 91.6%、問31は96.1% / 98.3%→95% / 94.6%であった。保護者アンケート問22は94.2% / 98.3%→91.7% / 97.7%、問24は88.9% / 96.7%→84.5% / 88.4%、問25は90% / 95%→88% / 93%であった。</p> <p>⇒(ア)(イ)ともに全体的にやや減少しているが、いずれの項目90%程度の高水準であることから、引き続き学校全体で生徒支援を行い、合理的配慮の整備とともにすべての生徒が校内で安心して学び、過ごせるような環境整備を行う。(ユニバーサルデザイン)</p>
<p>確実な進路保障の仕組みを作る</p>	<p>(ア) 早期に進路への意識付けができるよう進路のカリキュラムを構築する。</p> <p>(イ) 生徒の状況把握に努め、保護者との連携のもと適切な進路支援を行う。</p>	<p>(ア) 進路ガイダンスや進路面談の実施、および動画配信やメール配信機能を利用した情報提供を行い、一人でも多くの生徒が卒業時に希望の進路に進むようにする。</p> <p>(イ) 生徒一人一人にふさわしい進路選択の支援をし、進路決定率を上げる。</p>	<p>(ア)(イ) 生徒アンケート問32「学校は進路について適切な相談や情報提供ができていた」、問33「自分にあった進路を見つけることができた」、問39「この学校でこれからの目標が見つかった」、及び保護者アンケート問26「学校はお子様の進路について、適切に情報提供し、相談にのっていた」、問27「お子様にあった進路を見つけることができた」</p>	<p>(ア)(イ) 生徒アンケートの肯定的評価は問32は2021年度90.6% / 98.2%→91.4% / 89.2%、問33が61.2% / 94.7%→70.5% / 86.5%、問39が66.2% / 85.9%→84.5% / 86.5%であった。保護者アンケート問26は86.7% / 95%→86.5% / 93.0%、問27は項目なし→69.8% / 95.4%であった。</p> <p>⇒問33の在籍生に関しては「お子様にあった進路を見つけることができた」は、進路が決まっていない生徒が一定数いるため次年度より、進路の「方向性」という文言に修正する。問39の「この学校でこれからの目標が見つかった」に関しては大幅改善されており、適切な進路支援ができていると言える。進路選択が多様かつ複雑化しているうえ、生徒のニーズも様々なため、そして、引き続き通信制高校にとってよりよい進路支援の在り方を検討し、確実な進路保障の仕組みづくりを行う。</p> <p>また、今後はキャリア教育の一環として、他機関と連携し、一人ひとりが多様な職業人と出会い、対話し、校外活動等が体験できるプログラムを推進する。</p>

<p>開かれた学校づくりを目指し、生徒が活躍できる場を増やす</p>	<p>(ア) YMCAの特長を活かしたグローバル教育を実施する。</p> <p>(イ) 総合的な探究の時間や特別活動、ボランティアにおいて、YMCAの特長を生かした内容を実施し、生徒の主体性や積極性を促す。</p> <p>(ウ) 医療・教育・福祉機関など外部機関と積極的に連携を取る。</p>	<p>(ア) YMCAのネットワークを通じた海外交流プログラムや、留学生と交流する機会を提供する。</p> <p>(イ) 教育目標である「命の尊厳」に沿った総合的な探究の時間や特別活動、ボランティアを施す。</p> <p>(ウ) 引き続き起立性障害の専門家(例:関西医科大学)と連携するとともに、生徒の学校外での居場所作りや進路選択のためにNPO団体と連携を進める。</p>	<p>(ア) 生徒アンケート問9「特別活動やその他のプログラムなどを通して地域や海外の人と交流する機会は充実していた。」</p> <p>(イ) 生徒アンケート問1「学校の理念・方針を理解していた」、問7「学校行事は生徒が参加しやすいものであった」、問8「ボランティア活動の情報も豊富で参加しやすいものであった」、問10「子どもたちや地域の人たちとも一緒に参加する活動があり満足であった」、及び保護者アンケート問7「学校行事はお子様参加しやすいものであった」問13「学校行事以外でも生徒が活動できる場が充実していた(ボランティア活動等)」問19「特別活動の内容や案内は適切だった」</p>	<p>(ア) 生徒アンケート問9の肯定的評価は2021年度72.1% / 79%→68.6% / 70.3%であった。 ⇒2022年度も引き続きコロナ禍であることが如実に反映された。2023年度は海外との交流制限が緩和された状況なので、留学生との交流の機会、多文化に触れる機会を積極的に設置する。</p> <p>(イ) 生徒アンケート問1の肯定的評価は2021年度94% / 98.3%→92.7% / 89.2%、問7は86.3% / 94.8%→94.8% / 81.1%、問8は82.8% / 91.3%→79.5% / 81.1%、問10は76.5% / 87.7%→68.5%/70.3%であった。保護者アンケート問7は項目なし→80.7% / 90.7%、問13は79.9% / 88.4%→83.8% / 88.4%、問19は95.3% / 98.3%→94.3%/93%であった。 ⇒生徒の学校の理念・方針の理解は高く、学校行事も参加しやすいと感じている。一方、問8「ボランティア活動の情報も豊富で参加しやすいものであった」、問10「子どもたちや地域の人たちとも一緒に参加する活動があり満足であった」、に関しては2022年度も引き続きコロナ禍であったことも一因としてあり、減少しているため、2023年度は意識的にYMCAのネットワークや他機関との協働でのボランティア活動の周知および地域交流をすすめていく。</p>
<p>持続可能な学校とするための体制を確立させる</p>	<p>(ア)(イ)(ウ) 社会の大きな変革の中で新しい学校の形を探究し、地域社会に貢献できる学校づくりを行う。</p> <p>(エ) 組織改善の取り組みと将来を担う人材の確保をする。</p>	<p>(ア) ICTの活用を図り、Edtechを推進する。</p> <p>(イ) 日本語のサポートが必要な生徒への支援を充実させ、カリキュラムを構築する。</p> <p>(ウ) 「健康教育」の一環として、当事者および保護者に向けた仲間づくりや健康につながるプログラムを実施する。</p> <p>(エ) 教職員間のチーム作りや教職員研修の充実に取り組む。</p>	<p>(ア) 自己評価チェックシート問15「生徒の情報活用能力の育成を図っている」問16「情報の発信に伴う責任など情報のモラル面の教育に十分取り組んでいる」</p> <p>(イ) 自己評価チェックシート問26「他国の歴史・文化の理解、異文化交流など国際理解に関する教育活動を取り入れている」</p> <p>(ウ) 自己評価チェックシート問21「知性・身体・精神のバランスのとれた人の成長に寄与する健康教育を実施している」</p> <p>(エ) 自己評価チェックシート問4「教員・教科間連携」・5「教員と事務職員の連携」項目、および問36～40「教員研修」項目</p>	<p>(ア) 自己評価チェックシート問15の肯定的評価は2021年度54.6%⇒53.4%、問16は45.5%⇒26.7%であった。 ⇒問16は大幅に減少している。今後は、タブレットの活用、レポートの電子化(ロイロノートの活用)に取り組み、対話的・協働的な学びの場の実現と情報能力育成と情報モラル指導の向上を目指す。</p> <p>(イ) 自己評価チェックシート問26の肯定的評価は2021年81.9%⇒73.4%であった。 ⇒こちらは、昨年度より減少しているため、学校全体の取り組みとして教職員への意識を高めていく必要がある。</p> <p>(ウ) 自己評価チェックシート問21の肯定的評価は2021年度36.4%⇒73.3%であった。 ⇒こちらは、昨年度より大幅に上昇している。Yリンクコースの設置やイベント等、学校全体の取り組みとして実施していることから教職員への意識が高まっている。</p> <p>(エ) 「教員教科間、教職員間の連携」については改善傾向にあるため、引き続き、よりよい連携を図る。一方、教員研修部分は改善傾向にあるが以前数値は低い。教員の資質向上のための教員研修および初任者サポートをすすめる。 (詳細は教職員自己評価の結果と分析の「5」を参照)</p>